



「日本の気候景観 一風と樹 風と集落」

青山高義・小川 肇・
岡 秀一・梅本 亨 編
古今書院, 2000年1月
181頁, 2,800円 (本体価格)

本書は、矢澤大二先生の「気候景観」(1953年)出版後、半世紀に近い歳月を経過して刊行された。著者らの議論と実践の集約としての、日本の気候景観研究である。

気候景観とは、気候現象がある地域的広がりを持って、しかも目にみえる姿で地表、植物、人間生活などにその影響の痕跡を残したものである。偏形樹や樹水のような自然現象に現れる自然景観、屋敷林・防風林など人文現象に現れる文化景観が研究対象となる。本書では「風と樹」をテーマとして、それら研究対象の中から偏形樹と屋敷林とに焦点を当てている。

冒頭、気候景観の概説中、気候景観の2つの意義が明記されている。まず、気候景観を気候の表現体と考えて、いわば、粗い気象観測網を埋める測器の代わりとして活用しようという立場がある。日本における気候景観研究では、このように気候特性の指標として気候景観を位置付ける立場のものが主流を占めてきた。だが、気候景観研究の意義はそれだけに止まらない。さらに、気候の影響の受容体である植物や人間を主体として、主体にとって重要である気候環境を気候景観の研究によって明らかにしよう、という立場が存在する。すなわち、環境としての重要性、意義をも豊かに考える、ということである。

気候景観は、微細な空間分布性や要因の複合性などのような、測器による観測では捉えがたい内容を包括しており、環境評価基準となり得る可能性を持つ。気候景観に対し、客観的・定量的評価を加えつつ、環境の影響の受容体である植物や人間を主体に据えて洞察を加える過程は、研究意欲をかき立てられる作業であると同時に、方法論の体系化を始め十分な議論を必要とする作業でもある。

こうした議論を経て、気候景観を成立させている様々な要因の結びつきを明らかにしながら、気候要因が景観の形成に果たす役割を分析・解明していく姿勢を堅持することの必要性を、本書では指摘している。

また、今後の気候景観研究のあり方として、たとえば偏形樹によって卓越風向を推定する場合のように、

気候景観から気候要素の平均値を読み取ることから、偏形樹の形成期間の環境変動を明らかにしようとするような、空間的・時間的規模を伴った水準の研究に深めることの重要性を強調している。

以下、本書の章立てを示しながら、各章の内容を簡単に紹介する。

第1章 気候景観研究とは

第2章 山の偏形樹をめぐる

第3章 平野と海岸でみられる偏形樹・防風林・屋敷林

第4章 気候景観の調べ方

第1章では、概説から始まり、研究対象(偏形樹・屋敷林)の説明、日本の風系・積雪分布・気候区・植生分布の解説などが続く。第2章では、「山の偏形樹」を取り上げて、ここでの“最北端”大雪山(しっぽ状植生)から“最南端”屋久島の主峰・宮之浦岳(白骨樹など)まで14例が語られる。蔵王山におけるモンスター(オオシラビソ)に過冷却の水滴が衝突・凍結して霧水ができ、さらに雪に覆われつつ巨大な塊に成長したものの形成と樹木の偏形に関わる謎、北八ヶ岳で見られる縞枯れの謎など、興味深い謎が例としてあげられている。

続く第3章では、「平野と海岸の偏形樹・防風林・屋敷林」の実例として、“最北端”利尻島(卓越風と塩風)から“最南端”琉球諸島(モクマオウの偏形など)に及ぶ18例が掲載されている。胆沢扇状地の集落では、屋敷林を「イグネ」、薪を積み上げた塀のようなものを「キズマ」と呼ぶ。このような地方独特の呼称や、阿蘇の「まつぼり風」のように現象をよく捉えた局地風の地名など、本章において特に印象的である。これらの第2章・第3章の2章を合わせ、ほぼ日本全域を覆う範囲で気候景観が各地から採録されている。また最終章の第4章で「山の偏形樹調査法」と「屋敷林・防風林の調査法」の2項目について、分析方法にまでふれた丁寧な調査方法がガイダンスされていることは、本書の特色の1つである。

全編を通して、実に多くの写真や図が採用されているので、視覚的に楽しく読むことができる。これは、本書のさらに大きなもう1つの特色であり、著者らがまさに脚で集めた財産とも思う。著者らが目指す、自然や地域の総理解、地域の自然特性や人々の営みの理解に繋げる役割を、本書は十分に果たしていると言えよう。“日本の風土”について、改めて考えさせられた。

(西武文理大学 小笠原洋子)